

本の紹介

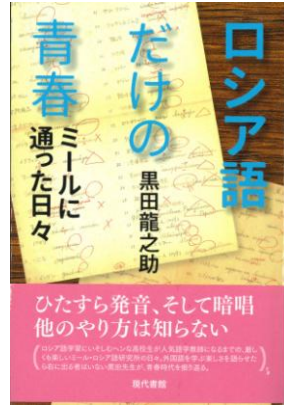
ロシア語だけの青春

～ミールに通った日々

著者;黒田 龍之助

発行;現代書館

定価;1500 円+税



ある晴れた日、ひとりの青年が私に一冊の本を差し出した。『ロシア語だけの青春～ミールに通った日々』、黒田龍之助著。そして「このやり方でレッスンしてください」と言う。

黒田龍之助、外国語好きなら知る人ぞ知る名前であろう。私も何冊か語学物エッセイを読んだことがある。それにしてもタイトル「ロシア語だけの青春」とはまた……と思いつつ、まずは読んでみることにした。

最初の数ページの授業風景で引き込まれた。「何、この学校、聞いたことない！」この本によると、NHK 講座のテキストに広告が出ているとある。手元にあった 1990 年代の NHK テキストを引っ張り出す。これは私にとってロシア語の教科書第 1 号で記念にとっておいたものだ。表表紙裏という堂々たる場所に、つつましい広告が出されていた。うーん、まったく気づかなかった……。

ミール・ロシア語研究所では「音をつくるのが大切」ということで、発音指導・矯正を中心に授業が進められ、文法説明、解答のある練習問題等、自分でできることは学習者の自助努力に任せる、とのこと。授業に参加するにはひたすら暗唱のための努力が求められる。レッスンは少人数制、授業中は極力日本語を話さない。体育会系張りの厳しさとダメ出し。噂では「一夫先生は口に手を突っ込んででも発音矯正させる」こともあったらしい(ミールに通ったことのある友人談。彼女が通っていたことも、私はこの度初めて知った)。本書を通じて、授業中の緊張感が伝わってくる。

私はロシア語講師として一応の経験を積んできたつもりではあるが、これまで文法の説明を一生懸命してきたなあとふと考え込む。いや、文法だって大事だし、と軽く心の中で言い訳しつつも、「発音と暗唱」が大事というのは分かる。おそらく外国語を勉強するのが好きな人なら、直感で分かるのではないだろうか。私はカフェでロシア語の個人レッスンも行っているが、たいてい学習者が「これを暗記するので聞いてください」と自分で暗記用の題材を持参してくる。私自身をふり返ってみても、新しい外国語を始めるときには、まず

暗唱から始めたものだった。みんな、分かっているのだ。だが、それを体系的にやる学校があったなんて！

遠い学生の頃の自分を思い出して、想像の中でミールに通ってみる。暗い雑居ビルの中、前時代的で、夏は涼しそうだが、冬は暖房が効かなそうな教室、薄暗い廊下に何やらぶつぶつぶやく数人の人(すべて想像)。……正直、初めてミールを訪れたときにこんな感じであれば、この時点で引き返しそうな気がする(笑)。ひとまず、そこは乗り越えたとしよう。教室の中も暗く、石油ストーブの匂い、やはりぶつぶつという生徒が席に着き、先生を待っている。廊下を通り抜け、教室に入れたなら、この雰囲気は好きかもしれない。そして、先生が登場、いきなりロシア語で時間を尋ねられ、端から順番に当てられ、緊張感に包まれながら例文暗唱、発音がまずければ「もう 1 回！」と怒号が飛ぶ……。怒号は飛んでないか？想像の中は、前時代的な喩えを許していただければもはや「巨人の星」あるいは「アタック No.1」の世界である。

私の大学時代は 90 年代なので、ミール・ロシア語研究所は健在であったはずだ。当時にミールの存在を知っていたなら、通うこともできたであろう。この学校の意義を正しく理解し、ロシア(またはロシア語)への情熱が溢れんばかりであれば、地方住まいであろうと私は通っていたかもしれない。しかし、想像の中でかつての自分に問うてみるも、そもそも体育会系のノリが苦手で、ロシア(語)への情熱もそれほどでなかった私は、はるばる東京まで出ていかなかったであろう。今でこそ、ロシア語への情熱も芽生え、体育会系のノリであれなんであれその意義が分かる今こそ——なのに、時すでに遅し。ロシア語を教える立場になり、ロシア語をゼロからやり直そうとまではさすがに思わないが、その教授法に直に触れてみたかった。それがもう叶わないのがとても悔しいが、出会いばかりはご縁とタイミングなので致し方ない。しかしながら、本書を通じてミールと知り合った。時空を超えるのが書物のいいところである。

本を読み終えて、件の青年のレッスンを引き受けることにした。音に重点を置き、大きな声で発音するのは、カフェレッスンには向いていないのだが、ひとまずやってみよう。ただ、レッスンを行うにあたり、直接の受講経験がないというのが正直心とない。ミールの授業で順番に指名されるため、生徒が自分の番を予測するのをよろしくないと考えた著者が、自身の受けたことのある授業で体験した「カード方式」(これで当たる順番が分からなくなる)を採用したという。「教育法というのは、こうやって伝わっていく」(130 ページ)。まったく同感である。

本書は黒田氏の「青春本」として興味深く拝読した。次はぜひ「ミール教程本」なるものの出版を切望する。

松下則子(神戸市外国語大学非常勤講師)